

絵画史料から復元した大崎苑と目黒川河口域から見る 江戸の都市景観について

Edo cityscape of Ousaki-en and Meguro river-side view restored
from the Historical picture materials

関 口 敦 仁

SEKIGUCHI Atsuhito

In the Edo period each Han (feudal domain) was to be lodged Daimyo and his family in Edo by "Sankinkoutai". For that reason, many Daimyo-Yashiki were dotted in the Edo. Shinagawa-Shuku is the gateway to Edo south. There are, each Daimyo-Yashiki are dotted on Takanawa plateaus on the north side and Meguro plateau on the south side of the Meguro River. It seems that the urban landscape of Edo was responsible for its characteristics by these Daimyo-Yashiki groups. I restore landscape from historical picture materials such as the scenery drawing and maps that draw them, and verify the urban landscape by Daimyo-Yashiki and agricultural land.

概要

江戸時代に参勤交代の制度により各藩は江戸に大名とその家族が在住することとなり、江戸地内には多くの大名屋敷が点在した。品川宿は江戸南の玄関口となり栄えた。その中心を流れる目黒川を挟み、北に高輪台地、南に目黒台地があり、それぞれの台地は、各藩の御屋敷地が点在していた。江戸の都市景観はこれらの大名屋敷群により、その特徴を持っていたと思われる。それらを描いた真景図や地図などの絵画史料から、江戸後期の景観の復元を行い、大名屋敷と農耕地による近世都市景観について検証する。

1、はじめに

現代都市化された都市の原風景を見出すことは可能なのであろうか。都市景観のアイデンティティを見出すことは住まいの土地について価値を認識するのも重要である。現実的には過去に遡って原風景を取り戻すことはできないのであろうが、現在の地理的状況がどのような自然的条件や人的条件で変化してきたかについて知り、今後の都市景観デザインへと参照していくことに異論を唱えるものはないであろう。また、それらを見捨て、利便性や経済的行為のみで、土地開発することから脱却して、生活空間の新たなデザインとして都市景観を考えていくことが、住人の利益にもなっていくはずである。

しかしながら、景観の記憶とは儚いもので、その土地に新たな建物に変わってしまえば、かつて何があったのかなどに記憶が及ぶのは直接その場所に関わった人たちだけであろう。

2、江戸の都市

2-1 大名屋敷について

江戸は参勤交代制度によって、大名の妻子は江戸に定住させられて、一年ごとに大名が国元からやってきて、一年間江戸に住んでいた。その江戸で住む屋敷には上屋敷、中屋敷、下屋敷とあり、上屋敷は藩主と家族などが住む中心的機能を持っていたが、他に藩の家来や食料、その他の物資などを保存するためなどのために中屋敷、下屋敷を所有していた。それらの土地は農民から借り受けた、抱地や将軍から下賜された拝領地を利用して、頻りに所有者は変わっていた。参勤交代制度は将軍の権力集中と大名統制のための優れた制度である。大名下屋敷は主に江戸の郊外地に大きな土地を拝領したり抱地にしたりして、藩の運営としての機能のみならず、藩主の別荘地としての目的を持ったものも、作られていた。このように江戸の藩邸が占める割合は非常に高く、庶民が集中する下町や一部の町人地域を除いて、多くの面積が幕府関係者か大名屋敷に利用されていた。大名屋敷は比較的的土地に余裕を持ち、地内に庭園を設けていたため、特徴的な景観を江戸の都市景観そのものに影響を与えていたのではないだろうか。特に大名屋敷は江戸の山手地区やその郊外を利用し、大地や高台、谷などを利用し取り込みながら造営されたものが多く、京都の洛内の平地に設営されたような壁囲いされた、都市景観に比べ、江戸の台地は縄文の海進と退行によって侵食され多くの尾根を持っていた。20 m前後の高低差を基準として、台地の高台平野部のみならず、丘陵地も積極的に庭園として利用され、外部とも接続性のある都市景観を形成していたのではないかと思われる。江戸の土地利用構成比（正井泰夫「江戸・東京の地図と景観」、古今書院、2000年）では東部低地 39.7%、開析谷底 16.8%、台地 43.5%であり、その台地には、大名上屋敷が 4.9%、中屋敷が 3.9%、下屋敷が 27.2%と占めていた。江戸全体では、城や幕府関連地が 4.4%、大名屋敷が 35.2%、武家屋敷が 22.5%、町屋が 20.6%、寺社が 14.3%で武士の土地だけで、72.1%も占めていた。

2-2 水の利用

江戸においては中世の荘園制度の影響は少なかったが、鎌倉幕府における荘園経営は、内陸部の関東平野や相模原地区に多く見られ、開析谷底や低湿地を多く持つ江戸は広大な田畑経営には向かなかったと思われる。しかしながら、多くの大名が全国から集まり、食料の確保のためにも、狭い土地であっても、藩領地内での耕作を行う必要性は高かったとおもわれる。このような台地において、農耕景観には近隣の河川の水の循環システムは必須であるが、できるだけ定常的に水を確保するために、上流から水を確保する用水は必須であった。

近世に入り用排水システムが確立し、同時に各地で大規模な新田開発が進んでいった江戸西方の武蔵野台地では川越藩主松平信綱の指示により、多摩川の水を羽村から武蔵野台地を通す玉川上水

や野火止用水など、新田開発のための用水路が建設された。特に玉川上水は江戸城下の多くの地域に飲用水と農業用水を供給した。『上水記』（寛政3（1791）年）には、玉川上水から飲料および灌漑の目的で33の分水が作られたと記されている。そのうちの 하나가仙川用水で1663年から、戸越の熊本藩下屋敷への庭内泉池用水として1666年まで利用され、その後は品川用水として、目黒台地全体を潤し、目黒川へ注ぎ込んだ。三田用水は武蔵野台地から高輪台地の尾根筋を通過して、目黒、白金、大崎、三田からそれぞれ、北は古川、南は目黒川へと流れ込んでいた。これらの用水は大名屋敷への飲料水や灌漑用水としての機能を発揮していたと思われる。

3、目黒川周辺の大名屋敷

目黒川は玉川上水の分水の烏山川と北沢川が合流する現在の世田谷区池尻あたりを上流として、中目黒で蛇崩川が合流して南東に流れ、御殿山の南を周り込んで品川宿を抜けて江戸湾へと注いでいる。品川宿は参勤交代で江戸に入る南の玄関口として栄え、その中心を流れる目黒川は江戸と境を南北に形成していた。その目黒川を挟み、北は高輪台地、南は目黒台地があり、それぞれの台地は、



図1、目黒川周辺の大名屋敷（安政）（「品川区内大名屋敷分布図」参照、品川歴史館）

各藩の御屋敷地が点在していた。両台地は縄文の海進により削られ、標高20mから30m程度の急な崖や丘を形成していた。目黒川の北側の高輪台地は江戸城下の南端ということもあり、多くの大名屋敷が設けられていた。それらの多くは下屋敷だったが、幕府からの拝領地や、農民から借り上げた抱地を加え、その多く大名屋敷は広大な敷地を所有していた。

江戸末期の大名お抱え地については、目黒川河畔近隣地の中目黒から河口域まで、大きな大名地としては、備前池田藩下屋敷、細川藩下屋敷、雲州松平下屋敷、松平仙台藩下屋敷、柳生対馬藩屋敷、森伊豆守三日月藩上屋敷、鳥取藩池田屋敷、熊本藩細川抱屋敷、島原藩松平抱屋敷などが存在した(図1、目黒川周辺の大名屋敷)。江戸の郊外にある大名下屋敷は別荘地としての性格もあり、備前池田藩下屋敷、細川藩下屋敷、雲州松平下屋敷、松平仙台藩下屋敷では特に庭園の造園にも力を入れ、その景観の美しさなどが伝えられている。その中で、池田藩下屋敷や雲州松平下屋敷では指図も残され、池田屋敷、大崎苑として伝えられている。島津山は明治以降に島津公が在住していたことでの名称であるが、それ以前は江戸の中頃から仙台伊達藩陸奥守伊達吉村の拝領地と抱地があり、その庭園や景観が描かれた「仙台候別業袖岡八勝図」からもそれらの景勝は有名であったのではと思われる。その中で特に大崎苑は第7代松江藩主松平治信が、御殿山西の地に広大な敷地を確保して隠居し不昧公として、屋敷内の西側の崖を利用して、12の茶室とそれらをつなぐ露地を中心とした庭園を作り上げた。

4、絵画資料について

絵画史料には、地図、錦絵、真景図などの写生画や大名屋敷の図面などの指図を挙げることできよう。

4-1 地図について

江戸の地図では主に屋敷などの領地を示し、位置関係は判断可能だが、地形や植栽などがわかるものは少ない。そのような中で、明暦の大火直後以降に作られたと思われる、三井文庫所蔵「江戸大絵図」明暦3年(1657年)頃は、大名下屋敷が広がりを持って作られていく以前の江戸の地形なども表すものとして貴重なものであり、また、地理的な状況が描かれた描写からも力を持った絵師の手によるものとされている。

江戸の地図の役割は、江戸城下の大名屋敷、寺、町家などの関係性と街道との位置関係を表すものとして完成される。その代表的なものとして、「分間江戸大絵図」明和9年(1772年)があり、版の変更、色刷りを繰り返しながら、「分間江戸大絵図完」安政6年版などへと継承されて利用されていく。しかしこれらは、位置関係を表しているが、現代地図のような地勢を表したものは程遠く、地形との関連性を見るには明治まで待たなければならなかった。明治に入り等高線などを利用する西洋式地図が制作されるようになる。特にフランス式地図として制作された迅測地図は植生などのエリアも表示され、江戸末期の農地の状況も読み解くことができる資料となっており、近年農政局より、それらを公開し、現在地と比較できるウェブサービスを研究用にも展開している。「東京実測全図」明治19年-21年、内務省地理局(いずれも五千分の一:「江戸・東京市街地図集成」地図資料編纂会、1992年、柏書房より)のような陸軍により制作された地図などが、現在の地形図で使われる測量法で作られた。また、陸軍測量部を中心として、明治の終わりまでには東京の地図として更新を続け、江戸から近代へと入る都市化する変化を読み解くことができる。本研究で対象とする目黒川河川域は現在山手線が通る目黒、五反田、大崎、品川の地域で、江戸期の地図では

目黒、白金、大崎、高輪、荏原が対象となる。地図では、江戸地図のうち、目黒白金図までが江戸の内であり、目黒川より南の荏原大地は、品川用水を引く発端となった熊本藩の広大な下屋敷があった。その地は戸越（とごへ、とごし）と呼ばれ、江戸越しの地であった。明治初期の地図は品川町、目黒町が対象となる。

4-2 浮世絵

浮世絵は木版による色刷りを施した版画であり、一般民衆向けに江戸府内の名勝地と呼ばれるところが多く刷られた。歌川広重や葛飾北斎が描いた東海道などの道中の風景や富士山の眺めなどの需要が多いと思われる。本研究対象としては、御殿山の花見風景、品川宿からの風景、目黒の新富士、本富士からの眺め、江戸名所絵図の目黒行人坂、目黒不動、千代ヶ崎などの背景に含まれる目黒側沿いの風景から、山並みなどの佇まいが読み取ることができる。広重画『名所江戸百景』「目黒新富士」(図3)は鏈ヶ崎の別所坂の東に作られた、新富士を北側から南を見た風景である。手前から三田用水が通り、奥に目黒川河畔の水耕地域と目黒台地、丹沢山脈、富士山がある。広重画『名所江戸百景』「品川御殿山」(図4)は花見の季節の御殿山の東側からの登り道が描かれており、20mほどの高低差がある地形的特徴がよく見て取れる。また、現在の目黒駅あたりから目黒不動への向かう道すがら、急な下りの坂道が現れる。広重画『名所江戸百景』「目黒爺々が茶屋」(図5)ここから行人坂へとつながり坂下には目黒川に掛かる太鼓橋があり、その向こうには水田、畑、雑木林が点在する目黒台地の緩やかな丘陵と丹沢山脈と富士山のある風景が広がっている。



図2、広重『名所江戸百景』「目黒爺々が茶屋」東京都立中央図書館所蔵

図3、広重『名所江戸百景』「目黒新富士」国立国会図書館所蔵

図4、広重『名所江戸百景』「目黒元富士」東京都立中央図書館所蔵



図5、広重『江戸名所四季の詠』「御殿山花見之圖」東京都立中央図書館所蔵

4-2-1 御殿山

御殿山は徳川将軍家が鷹狩りの折に使った品川御殿があったことからこの名称がつけられた。南に沢庵和尚が興した東海寺があり、様々な場所からもランドマークとして認知された場所である。広重画「品川御殿やま」(図6)、同「御殿山の花見」(図5)で見るとかなりの高台であったことが確認される。これは土取りされた東側から見た風景であろう。すでに宝暦9年(1759年)江戸城二の丸のための土取りから北部が土取り場となり、嘉永期(1848-1854年)に入り、黒船への対策として台場が建設されることとなり、現在の品川神社の境内のあると西側高台を残して、土取り地として削り取られた。安政3年(1856年)に刷られた図6ではすでに海岸のある東側から西へ向かって土取りがなされた後の崖が描かれていると推測される。また、明治に入り東海道鉄道線路建設のため、品川から直線的に南南西に向かって削り取られ、現在の地形となっている。また、幕府から外務省への引き継ぎ資料として、御殿山と周辺の図(図7)があり、西側に大崎苑のあった敷地に鳥取藩抱地と松江藩抱地が記載されている。



図6、広重『名所江戸百景』「品川御殿やま」安政3年(1856年)、東京都立中央図書館所蔵



図7、東京大学資料編纂所蔵御殿山最寄図のスケッチ

4-2-2 鍵ヶ崎

現在の目黒区中目黒2丁目に旧山手通と駒沢通りが合流する所が鍵ヶ崎交差点となっている。当時は高台の一部が鍵のように迫り出していたためこの地名が付けられたと言われているが、現在はそれが削り取られているためその形状を窺い知ることはできない。

槍ヶ先につながる台地には、北方開拓で有名な近藤重蔵が広い土地を持っており、すでに作られていた元富士（西富士）に対し、富士講にその土地に新たに新富士を作り、多くの参拝客が訪れる地となった。最近の目黒区の発掘調査では、その地下に胎内めぐりが発見され、その富士信仰の深さが垣間見られる。しかし、近藤重蔵の息子が隣の百姓との地権のもつれからの殺傷事件（鍵ヶ崎事件）を起こし、重蔵は大溝藩お預けとなり、この地に戻ることはできなかった。その重蔵の関連



図8、一雲齋歌川國長（1790-1829）『鍵ヶ崎富士眺望図』東京大学資料編纂所蔵

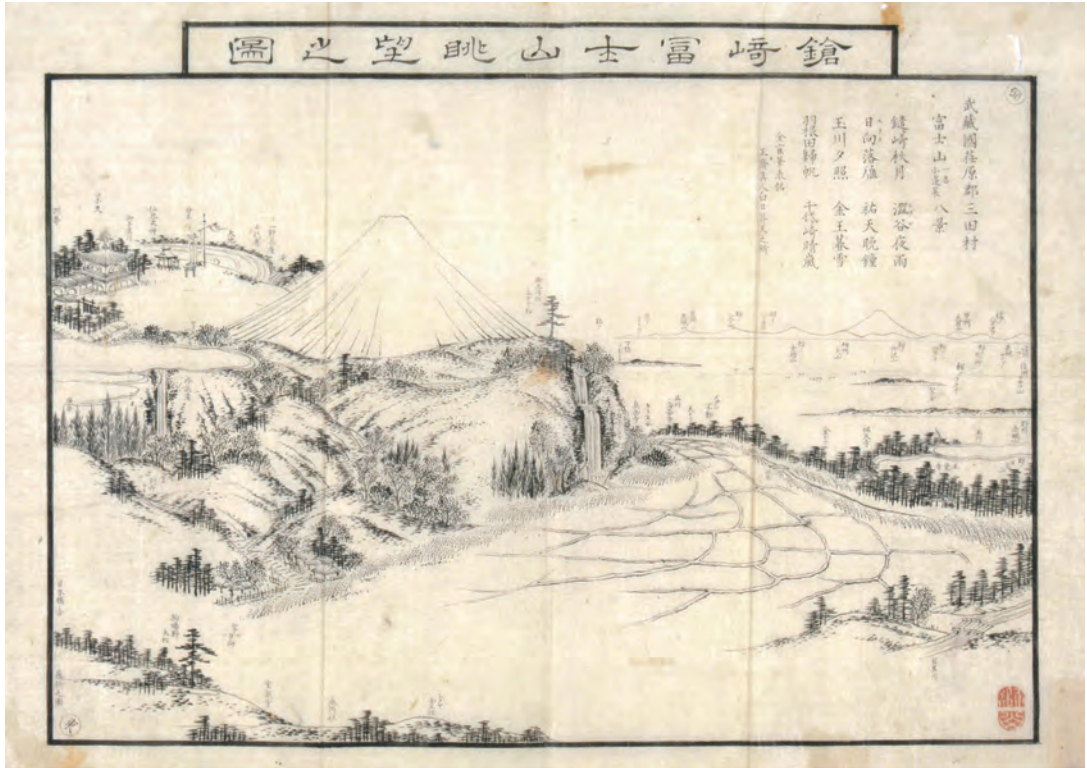


図9、『鑓ヶ崎富士眺望図』東京大学資料編纂所所蔵

資料として、鑓ヶ崎の風景はほぼ同じ構図で描かれていて、その版下や扇図の下書きなど5点が東京大学資料編纂室に所蔵されている。図8の彩色版では、高輪台地と目黒川との約20mの標高差がよく見て取れる。そして、目黒側沿いの水耕地と目黒不動から繋がり点在する雑木林群が江戸湾まで続いていることがわかるだろう。図9の鑓ヶ崎富士眺望図は、版下であるが、地名や山並みにそれぞれの名称が示され、東につながる、丘陵地や江戸湾に浮かぶ羽根田、富士山に連なる箱根、双子山など当時の景観が詳細にわかる作品となっている。

4-3 袖が崎の絵画史料

現在、清泉女子大のある場所は、明治に入り元島津公爵邸があったことから、島津山と呼ばれている。それ以前は寛保3年(1743年)奥州仙台藩伊達家の下屋敷を構えていた地で、西に雉神社と宝塔時が隣接する。仙台藩は他に大井にも下屋敷を持っていたが、その荷物を文化の時代に移し、伊達吉村第五代仙台藩主が下屋敷として使用していた地である。現在もその屋敷の指図は発見されておらず、庭などの詳細な配置等についてはわかっていない。当時の庭園や景観について国立国会図書館所蔵の小沢圭二郎指示による写の『仙台候別業袖岡八勝』(図10、11、12)があり、原本の説明書きでは、清水、禿が池、南岡(図11)、富士見茶屋(図12)、紅葉台、方角石(図10)などが描かれている。景勝地としても当時から有名であったと推測ができる。明治初期まで、

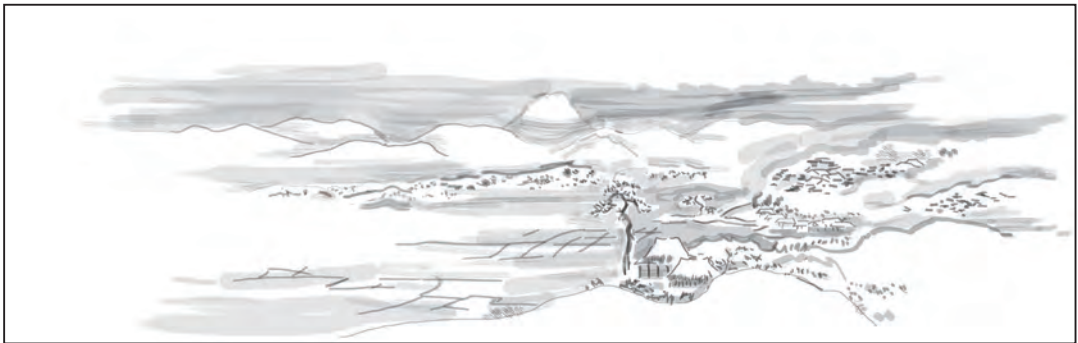
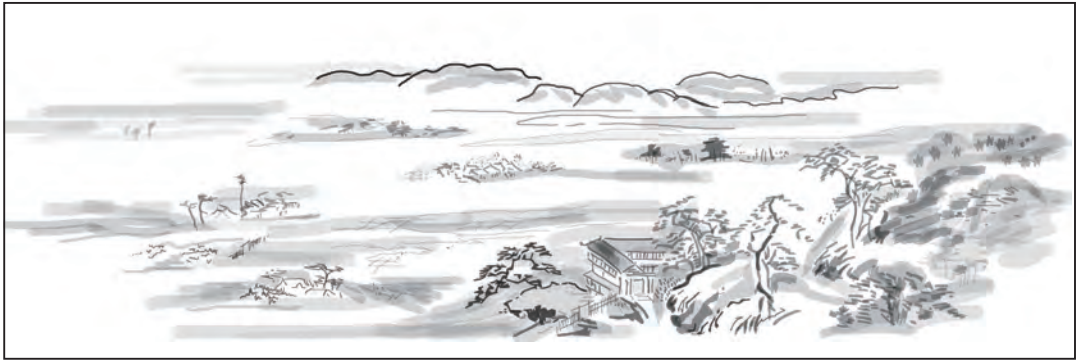
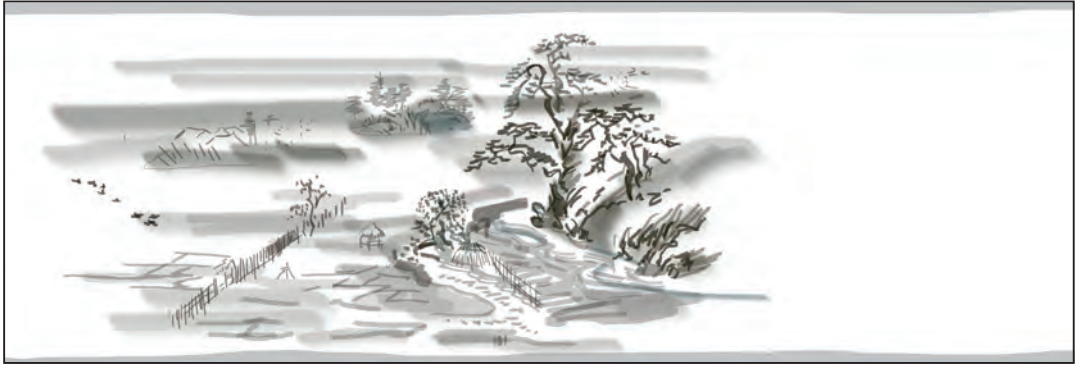


図 10、「仙台候別業袖岡八勝 方角石」国立国会図書館所蔵のスケッチ
図 11、「仙台候別業袖岡八勝 南岡」国立国会図書館所蔵のスケッチ
図 12、「仙台候別業袖岡八勝 富士見茶屋」国立国会図書館所蔵のスケッチ

袖が崎西側に大きな池があり、それが禿ヶ池の可能性もあるが、敷地内の名称を記述した資料も見つかっておらず、憶測の域を出ない。「南岡」（図 11）では南方面を眺め江戸湾上に浮かぶ帆船や羽根田島の島影も見つけることができる。「富士見茶屋」（図 12）は、台地南端から、西方を眺めた風景であろう。丹沢山脈の稜線や富士山の位置、目黒台地の稜線などからも、どのような景観であったかを判断できよう。「方角石」（図 10）は、仙台藩の敷地西の下に流れる川か、向かいは現在の五反田あたりの風景かと思われる。崖の向こう側には宝塔寺、雉の宮があった位置ではないかと考えられる。

現在もほぼ同じ土地に宝塔寺と雉子神社は座している。

『江戸名所図会』「雉の宮」(図13)では、地理上の位置関係から、その反対側からの風景ではないだろうかと推定ができる。

また、『江戸名所図会』「夕日丘行人坂」(図14)では目黒不動境内に上がった位置から東北方向を望む行人坂とその東の夕日岡が描かれ、手前を流れる目黒川が下流へ向かっていく田園風景と御殿山を超えて江戸湾への景色が見て取れる。

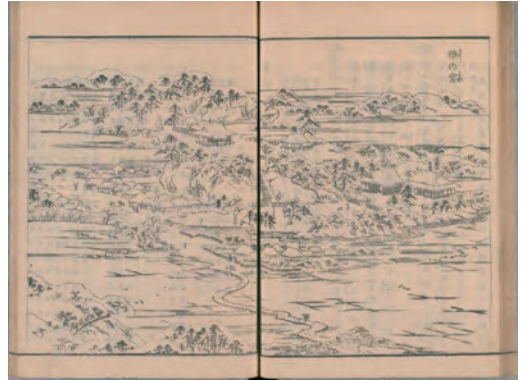


図13、長谷川雪旦『江戸名所図会』「雉の宮」
天保7年(1834-1836)年、国立国会図書館所蔵

4-4 大崎苑とその絵画史料について

第七代松江藩主松平治郷(1751-1818)は、拝領地と抱地により、18000坪余の土地を確保し、屋敷や奥方の住まいなどの他に、庭園を設置し、大崎苑は文化3年(1806年)に建てられた。隠居後は不昧公として住み、茶会を開いて、多くの人を招待した。大崎苑は様々な様式を持つ茶室を自ら設計、建築し、露地から露地へとつながる庭園として、ユニークな造りを持っているのが特徴である。不昧公は文政元年(1818年)に没した。資料としては、松江歴史館に所蔵されている巨大



図14、長谷川雪旦『江戸名所図会』「夕日岡行者坂」、
天保7年(1834-1836)年、国立国会図書館所蔵



図15、『大崎御屋敷分間絵図面』、「上が西方向」、松江歴史館所蔵

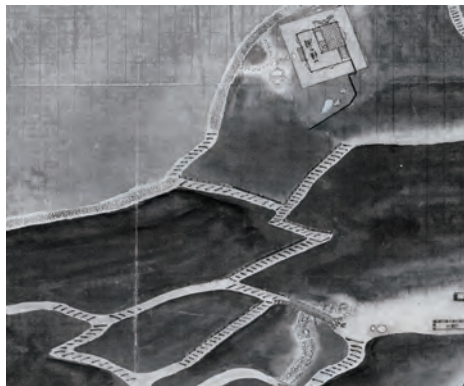


図 16、『大崎御屋敷分間絵図面』「簇々閣」部分、
松江歴史館所蔵



図 17、『大崎御屋敷分間絵図面』から階段抽出部分

な指図『大崎御屋敷分間絵図面』がある（図 15）。指図には、茶室を中心に細かな描写がされ、それらは図面として読み解くことのできる重要な資料となっている。この図で着目したのは、西側斜面に該当する、道に階段の描写があり、その段数の解釈から、等高線との照合が可能とされ地点である。この部分（図 16）を抽出して、3 次元的なモデリングに生かした（図 17）。

大崎苑は隠居した不昧公が繊細で優雅な 11 の茶室を配したことから、大名数寄の綺麗さを極めたものとして、江戸市内でもその景勝は有名であり、そこを訪れ、茶会に招かれた人々たちによる訪問記や景色や茶室の配置図の写しなどが多く存在する。

①谷文晁 雲州不昧公大崎別業真景

国立国会図書館本：谷文晁 [原図]、磐瀬玉岑 写、1896 年

松江歴史館本：谷文晁 [原図]

谷文晁（1763-1840）は桑名藩主松平定信（楽翁）のお抱え絵師として支えていた時期文化 9 年（1812 年）までに、楽翁の指示により描いたとされる。本来は二巻あったが、桑名藩での火事により一巻のみが残されたため、小澤圭二郎の指示による複写本が作られたことが国立国会図書館本には記されている。一方その一巻の原本と思われるものが、近年松江歴史館に所蔵されている。それは国立図書館本と比較して、松江歴史館本では柔らかな筆感と広がりを持った空間描写がなされており、文晁の真筆であると思われるものであるが、まだ特定はされていない。そこには・喫茶庵・独楽庵入口・独楽庵・幽月亭・稲荷社・待合・蓮池・利休堂・簇々閣・富士見台・清水茶屋・紅葉台が描かれている。

②不昧侯大崎別業図并亭榭明細図 写し、国立国会図書館蔵

嘉永元年（1848 年）に描かれたものの写しで、かつてあった茶室の図面が添えられ庭園風景が描かれている。そこではお台場設営のためにすでに茶室は撤去され、大きな石なども取られた状況を示している。沖天橋と独楽庵がかつてあった場所が描かれている。

③大崎園図巻 写 1877 年 松平不昧会庭園茶室図 松江歴史館蔵

原本作者は不明、大崎園内の茶室の細かな描写、材料などを明記した、詳細な絵画資料である。

以下の箇所が記録されている。・蓮池・利休堂・簇々閣・富士見台・清水茶屋・紅葉台・窺原・眠雲・

松暎・為楽庵・花畑・喫茶庵・独楽庵入口・独楽庵・幽月亭・稻荷社・待合。

④大崎名園一覧雑記 雲州不昧公御数寄庭園写図 島根県県立図書館館蔵

大崎苑の訪問記であるが、最後に庭園全景図の写があり、珍しい。ただその描写が明瞭ではなく、風景の判別が難しい。

5、復元画像から見る景観

大崎苑と目黒川近隣は4章であげた史料をもとに、国土地理院のDEMデータと照合しながら、3DCGソフトウェアで制作をおこなった。大崎苑内の建物のうち茶室等については、できるだけ史料に記述されている、材質感を出そうと試みた。

植栽については、当初ボリュームをつけたモデリングも行ったが、茶室周りの植栽情報は、谷文晁の真景図からテクスチャーデータに利用した。



図18、『大崎御屋敷分間絵図面』清水茶屋部分 松江歴史館所蔵

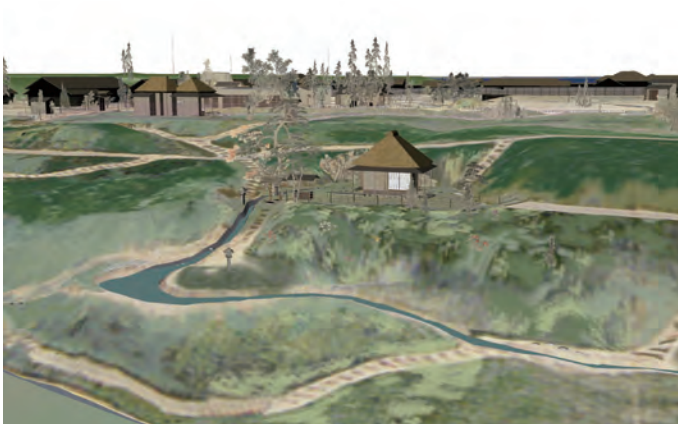


図19、大崎苑復元図、清水茶屋付近

5-1 清水茶屋

大崎苑の清水茶屋は多くの茶会が開かれており、不昧公が気に入って頻繁に利用された茶室である。茶室軒下から湧き水を配置して、路地に沿って、崖下に流れ出る様に配置された特徴をもっている。大崎御屋敷分間絵図面の清水茶屋の部分(図18)では水の流れを積極的に地形的に活用して作られた様子が理解できる。また、雲州不昧公大崎別業真景、清水茶屋(図21)では背景の竹林や、門の大きな松や楓の紅葉など植栽を含めた茶室の風情を表している。また、上手には大きな杉林が生えていたことが見て取れる。これらの図をもとに、3次元に復元を試みると(図19, 22)、かなりの高低差を利用した清水の流れが利用されている。



図 20、伝谷文晁『不昧公大崎別業真景』「清水茶屋」、松江歴史館所蔵



図 21、谷文晁（原図）『雲州不昧公大崎別業真景』「清水茶屋」、磐瀬玉綴峯写、1896年、国立国会図書館所蔵

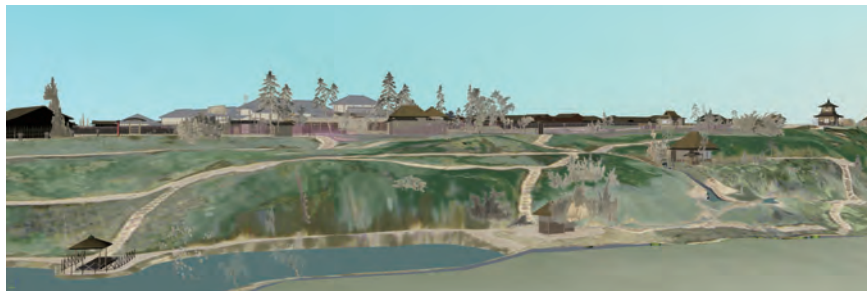


図 22、
大崎苑復元イメージ、
西側からの眺め

5-2 紅葉台茶屋

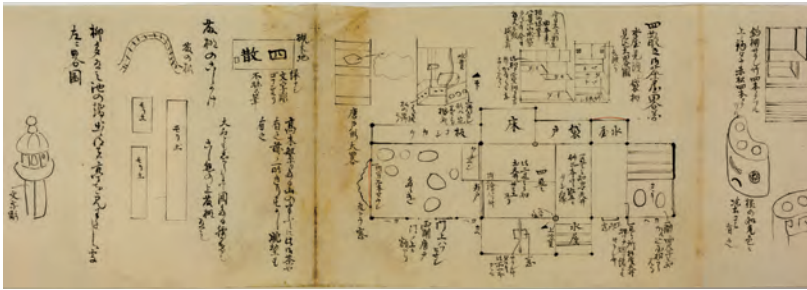


図 23、『大崎園図巻』部分、「松平不味会庭園茶室図」、写 1877 年、松江歴史館所蔵

庭園内最北部には紅葉台茶室が設けられた。開き唐戸を入ると、たたきに大きな7つの丸石が配置され、腰掛がある。茶室は4畳半台目で作られ、天井に開き窓が設けられている。



図 24、大崎苑紅葉台茶屋内観復元イメージ



図 25、大崎苑紅葉台茶屋外観復元イメージ

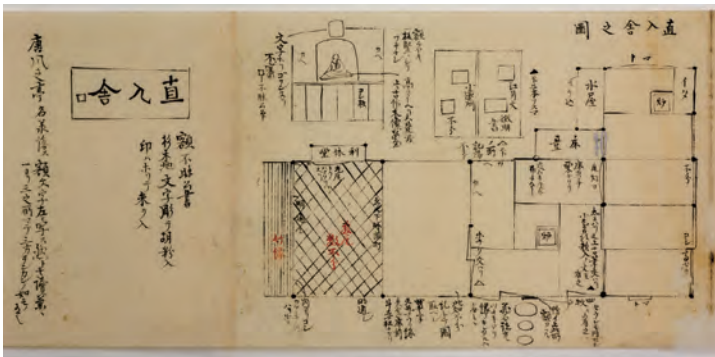


図 26、伝谷文晁『不味公大崎別業真景』「四散紅葉台茶屋」、松江歴史館所蔵

5-3 直入舎



図 27、伝谷文晁『不昧公大崎別業真景』「直入舎」、松江歴史館所蔵



直入舎入口には利休像が祀られていた。

図 28、『大崎園図巻』部分
「松平不昧庭園茶室図」、
写 1877 年、松江歴史館所蔵

5-4 簇々閣茶室

簇々閣は二階建てで屋根に唐銅の瓢箪を設けている。二階からは、江戸湾の羽根田の先、西は富士山に連なる箱根の山々を望むことができたであろう。

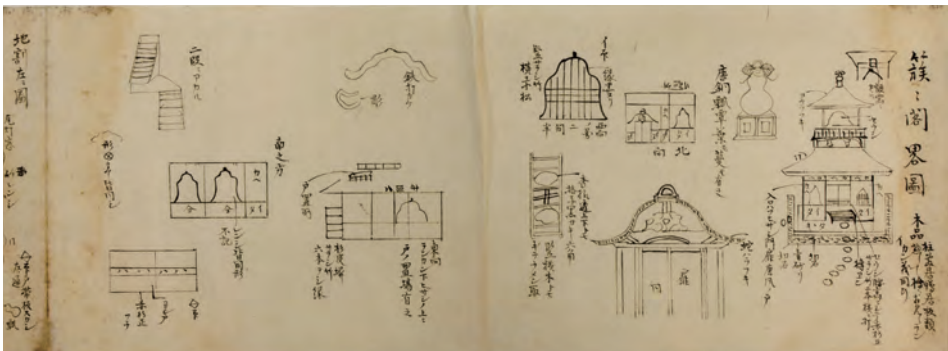


図 29、『大崎園図巻』部分「松平不昧会簇々閣室図」、写 1877 年、松江歴史館所蔵

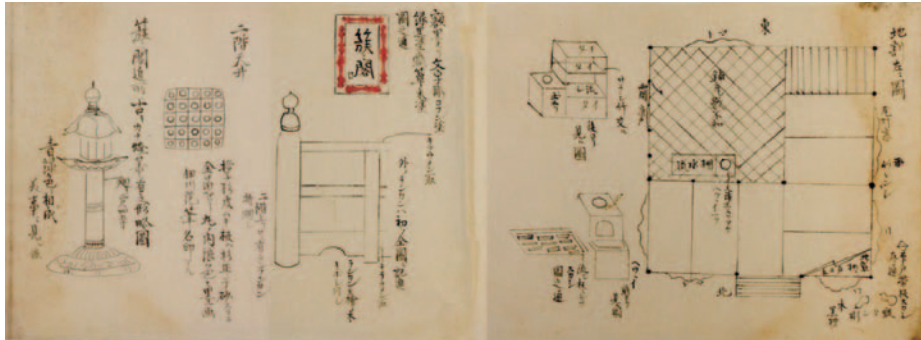


図 30、『大崎園図巻』部分「松平不味会庭園茶室図」、写 1877 年、松江歴史館所蔵



図 31、伝谷文晁『不味公大崎別業真景』「簇々閣」、松江歴史館所蔵

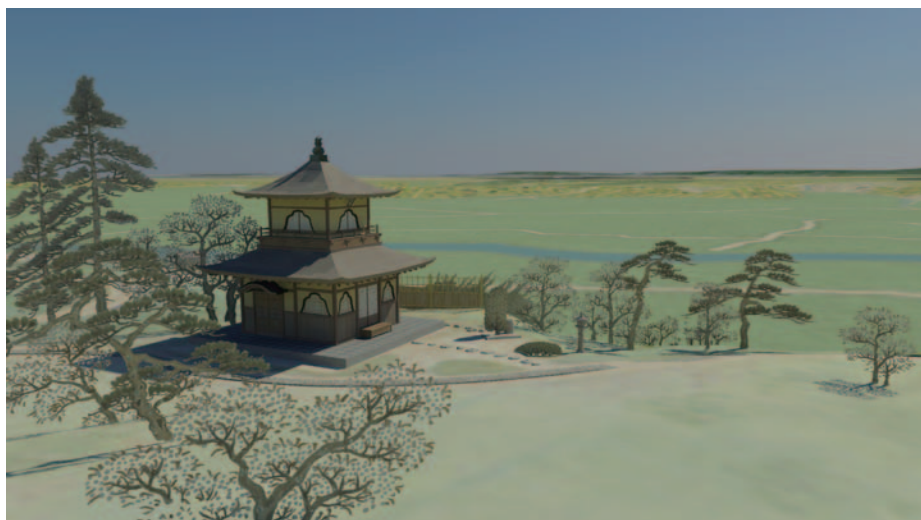


図 32、大崎苑復元イメージ 簇々閣外観

5-5 地形的特徴

御殿山をはじめ、高輪台地、目黒位置は目黒川河川敷から15M余の標高差があって、その崖に様々な崎が連なっているのがこの近辺の景観的特徴である。大崎苑のある御殿山北品川宿の西側は古くは小関と呼ばれていたエリアで、大地は南側がせり出し、品川宿を隠す門のような形をしている。西側河川敷は水田が広がり、崖下のエリアは葦が群生する湿地帯を有していたと考えられる。大崎苑では、崖下エリアの位置に蓮池(図33、図34)、窺原、待合があった。蓮池は絵からもわかるようになりに大きく、元々の湿地場所を活用し、台地から流れる清水や用水の末流を利用したのではと推測される。



図33、伝谷文晁『不昧公大崎別業真景』「蓮池」、松江歴史館所蔵

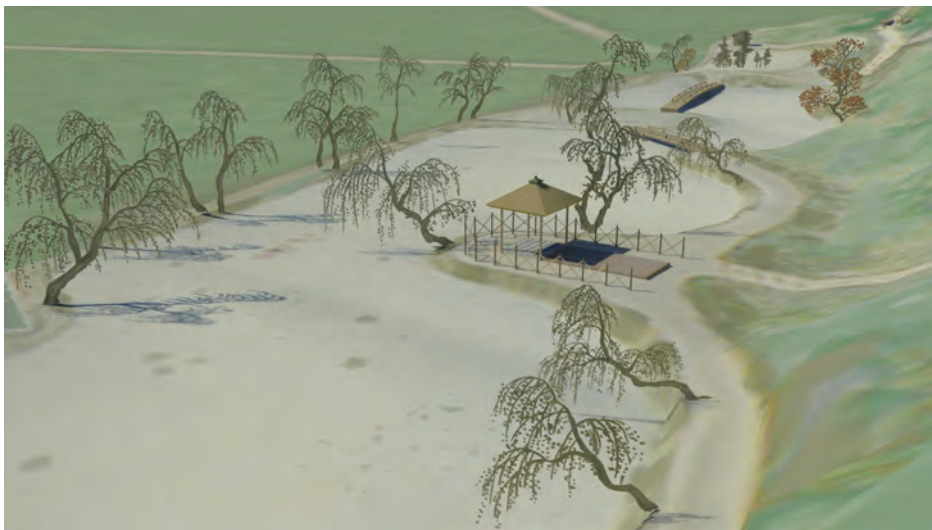


図34、大崎苑復元イメージ 蓮池



図 35、大崎苑復元イメージ 南側から



図 36、『大崎御屋敷分間絵図面』「窺原」部分、松江歴史館所蔵



図 37、『大崎園図巻』部分「窺原」、松江歴史館所蔵

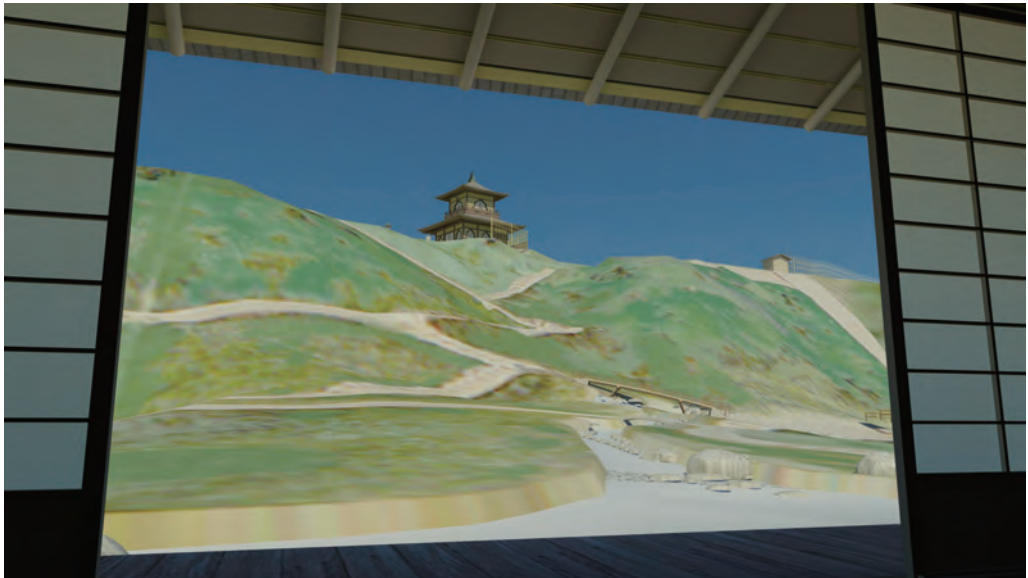


図 38、大崎苑復元イメージ 窺原内部から北の眺め

大崎苑はその外観はどのように見えたのであろう。目黒川の南から居木橋を渡り、見上げた先には大崎苑の植栽越しに茶室の屋根も確認できたのではないだろうか（図 35）。

苑の南西には窺原が設置されていた。窺原では丘の途中からの流れを室内から鑑賞することができた（図 37、図 38）。



図 39、大崎苑復元イメージ 喫茶庵北側から



図 40、大崎苑復元イメージ 大崎苑上空から西方向の眺め

6、江戸の景観

江戸の景観は二章で挙げた通り、大名屋敷や寺の大きな建築物や植栽による都市構成から形作られていた。町家は主に街道沿いに構成され、その景観を作り出していた。目黒川の河原は水田が締め、丘に向かって畑が繋がり、大名屋敷や寺領内にも畑などの耕作が行われているのが、一般的な風景であった。この付近は江戸の中でも広がりを持った風景であったと思われる。江戸の中心に向かえば、よりこれらの密度は増し、屋敷と農地は近接し、細い谷も庭園の一部と利用され、江戸の台地が生み出す都市景観は極めて特徴的な空間を有していたと思われる。しかしながら、江戸名所

図会などを見ても、寺領域を中心とした名勝地は描かれていても、大名屋敷を含む武家屋敷が描かれることは避けられていたようである。大名のお抱え絵師たちが、大名屋敷の敷地内の庭園などの特徴的な景色を描くことはあっても、屋敷を含めた日常的な景観を描いた形跡はほとんど残っていない。大崎苑の様に茶室を設営した珍しさや、詳細な指図の存在があれば、そのような絵画史料から景色の復元は可能であろう。



図 41、「迅速地図 明治 13-19 年」(歴史的農業環境閲覧システム・CECIUM 版より、農研機構・農業環境変動研究センター)



図 42、目黒川周辺の復元イメージ

現代は、これらの地域に高層ビルが密集し、地形が作り出す景色から離れてしまった、景観しか見出すことしかできない。現代都市が必然的な建造物密集構造を生み出すことは致し方ないにしても、その都市のアイデンティティを継続し続けることの努力もその都市の価値を維持し続けるためにも必要なことであろう。そのためにも、東京のような都市において過去の景観について常に情報を持ち続けることは重要なことと考えられる。

本研究は平成 26 – 28 年度予定科学研究費補助金 基盤研究 (C)「絵画史料と地理情報による大名庭園大崎苑の復元表示と近世都市景観の検証」研究課題番号：26370138 の成果とによるものである。

参考文献

- 『松平不昧伝 増補復刊版』松平家編集部、原書房、1999 年
『江戸大名下屋敷を考える』児玉幸多監修、品川区立歴史館編集、雄山閣、2004 年
『関東中世の水田の研究』高島緑雄、日本経済評論社、1997 年（明治大学人文科学研究所叢書）
『品川の原始・古代』品川区教育委員会、品川区教育委員会編、2005 年
「品川歴史館紀要第 19 号」（2004 年、品川区品川歴史館）
関口敦仁『江戸の水耕景観』「愛知県立芸術大学紀要 45 号」（2015 年、愛知県立芸術大学）
「大崎御屋敷分間惣絵図面」松江歴史館所蔵、江戸時代後期
「仙台候別業袖岡八勝」国立国会図書館所蔵、明治 29 年写